

北の冬

小川未明

青空文庫

私が六ツか七ツの頃であった。

外の雪は止んだと見えて、四境あたりが静かであった——炬燵こたつに当たっていて、母からいろんな怖しい話を聞いた。その中にはこんな話もあったのである。

毎晩のように隣の大貫おおぬき村に日が暮ると赤提燈あかちようちんが三つ歩いて来る。赤い提燈は世間に幾らもある。けれども何の提燈でも火を点すと後光が射すのが普通だ。然るにその提燈に限って後光が射さない。その赤い提燈は十間けんばかり互たがいに隔いだたりを置いて三つ、東南の村口から入って来て何処どこへか消えてしまうのである。最初それを見付みつけたのが村の端はずれに住んでいた百姓家の爺やじじいであった。夜遅くまで仕事をやって、もう寝ようと思つて戸の口を出るとその気味の悪い赤い提燈が三つ、彼方あちらの野原を歩いているのが見えたという。

その村の西には大きな池がある。やはり雪が降ふつたので水の上には雪が溜たまりっていた。きつとこの池の周囲まわりに住んでいる狐か狸が大雪で、食物に困つて種いろん々な真似まねをやるのだらうと思つて、その夜は寝た。明ある日爺はその事を村の者に話した。すると己われも今晚は見届てやると村の若者等らは爺の家を集つて、寝ずにその頃となるのを待つていた。

その夜は非常に吹雪ふぶきのした晩であった。普通の者は逆とても、この広い野原を歩けない。勿む

論道の付いている筈がなし、北西の風を真面に受けて、雪が目口に入つて一足も踏み出せるものでない。

やはり三つの提燈は東南の村の口から入つて来て、野原を通つて何処へか消えてしまつた。

「や、厭な提燈だぞよ。」と一人がいった。

「物凄い赤い燈火だな。」といった者もある。

「あれは人魂だ。」といった者もあった。

けれどその夜は、それで寝てしまった。明る日村の某々等は互に語り合つた。

「あの、提燈は何処へ消えるだろう。」と一人がいった。

「さあ、何処へ消えるか……。」

「池ではないか。」

「一つ今夜は見届けようじゃねえか。」

と相談が纏つた。某々等は例の爺さんの小舎に集つて、その時刻の来るのを待つていた。

その夜は珍らしく雪が晴れて、雲間から淋しい冬の月が洩れている……一望漠々たる

広野の積雪は、寒い冴えた月の光りを帯んで薄青く輝いていた。

「非常に寒い晩だな。」と一人がいう。

やがて、身を切るような木枯が野を横切つて、暫時その音が止むと、一人は、

「見えた見えた。」と村の端の入口を指した。

三つの赤い、後光のない燈火が、村の中へ入つて来た。其処で一同は、互に警め合つて、家を出てその提燈の行衛を追うて行つた。皓々として、白雪に月の冴え渡つた広野は、二里も三里も一目に見えるように薄青く明るかつた。夜が更けるに従つて、雪が凍つて堅かつたが、各自が警め合つて雪の上を踏んで行くと、脛を切るように抜け落ちるのである。折々木枯が激しく吹き荒んだ。けれど彼方に見える三つの提燈の燈火は瞬きもしなければ、揺れもしない。独りでに歩んでいる。やつと二三十間ばかりの処に近づいて、月の光りに透して見ると、提燈ばかりが歩いているのでなく、何やら人が持っているのだ。その人が——極くうすらりとして見えるのには、真白の装束を着た、全く常の人間でない。

「あつ、幽霊だ！」と一人は覺えず叫んで、其処に腰を抜した。同じくこれを見た一同は満身に水を浴せられたようにぶるぶると手足が戦えて竦んでしまった。で、野原の雪の中に蹲踞つて昵と白装束の三つの影を見送つていると、最初に立つたのは、老人のよう

頭に何か白いものを被^{かぶ}つてゐる。十間ばかり隔^{へだて}て、その次のはそれより少し脊^せが低くて、子供のよな歩き方だ。また十間ばかり隔^{へだて}て最後の一人は長く黒髪^{くろかみ}を後^{あと}に垂^{たれ}ていて女のように思われた。その三人は、始終俯^{うつむ}向^むいてゐた。各自の手^てに一つずつ持^もつた提燈^{ていとう}は、宙^{そら}に吊^{ぶら}下^さつてゐるよ^うに動^{うご}くともなく動^{うご}いた。一同は怖^こしいながらに息^{いき}の音^ねを凝^こらして見送^{みおく}つてゐると池^{いけ}の方向^{ほうきやう}へは行^いかず、広い野原^{のほら}を横^{よこ}切^きつて、隣村^{りんそん}の方^{ほう}へ過^かぎて行^いつた。冴^さえた月の光^{ひかり}りは一面^{いっぺん}に原^{はら}を照^てしてゐたが、ひとり三人^{さんにん}の白^{しろ}い衣^いの上^{うへ}には月の光^{ひかり}りが落ちない^{おちない}と見^みえて透^{とお}して見^みると雪^{ゆき}よりも更^{さら}に白^{しろ}い影^{かげ}は消^きえるよ^うに見^みえなくな^なつた。暫^{しばら}くして赤^{あか}い提燈^{ていとう}の姿^{すがた}も見^みえなくな^なつた……一同^{いっとう}は赤^{あか}い提燈^{ていとう}が見^みえなくなると、急^{いそ}に寒^{さむ}さが身^みに浸^ひみ込^こむのを覚^{おぼ}えて、その後は互^{たがひ}に口^{くち}も聞^きかず、凍^こえ死^しぬばかりで家^{いへ}に逃^{にげ}戻^{もど}つて寝^ねたといふことだ。やがて鷄^{にわとり}が啼^ないて、夜^よが明^あけ放^{はな}れると、あたりは昨日^{けふ}に交^まり替^かわらず、彼方^{あつち}には、枯^かれた並木^{なみき}があつて、遠^{とほ}くに森^{もり}が見^みえる。若^もしや、昨夜^{ゆうべ}の幽靈^{ゆうレイ}の足跡^{あしあと}はついていないかと行^いつて見^みると、ほんのそれらしい跡^{あと}形^{かたち}もなかつたといふ。

ここまで母^{はは}は真面目^{まじめ}で語^{かた}つて聞^きせた。

私は子供^{こども}心^{こころ}ながらにその幽靈^{ゆうレイ}は何物^{なにもの}であるか知^しりたかつたから、

「鉄砲^{てつぱう}で撃^うつてしまえばいいんだね。」と聞^きき返^{かへ}した。

「アア、そうだよ。」といって母は、もはや大分薄暗くなったから室^{へや}の内で眼を細くして針仕事を忙しそうにやっている。

「周蔵にいったら、きつと撃つてしまいうね。」と私は炬燵^{こたつ}の中に身体を半分もぐり込んでいう。周蔵とは私の村での、年若い猟師である。よくこの男は私の家へ遊びに来た。吃^{どもり}の、頭髪^{かみのけ}の箒^{ほうき}のように延びた、人の好い男である。

「そんなものに、かまうときつと祟^{たた}りがあるよ。」と母がいった。

「祟りてや、何？」と聞き返す。

「死んでしまうのだよ。」と母がいう。

私は怖しくなつて来た。もう日が暮れるのに間がない。それでなくても家の周囲は雪がこいで壁板^{したみ}や、葦簾^{よしず}などが立てかけてあつて、高い窓から入る明りばかりだから少し暮^{くれが}方に近くなると表はそうでなくても家の内は真暗だ。

耳を傾げると幽^{かす}かに鳥が啼いている。多分正善寺の杜^{もり}で啼いているのだろう。母は仕事を取り片附にかかった。私は炬燵に当っていないながら、先刻の話の筋を幾たびも思い返している。脊^{すず}にしている柱にかかった六角時計が、ガタン、ガタンとやっている。煤^{すす}けた神棚には大黒様がある。古い私の家は何処を見ても黒^{くろびかり}光のする気持がした。

「雪は止んでいるか知らん。」と母はいつて起上った。

「さあお湯へ行つて来よう。久しく入らなかつたから。」といつて私は無理に引き立てられた。私は温かな炬燵から出るのが辛かつたが、遂に仕度に取りかかつた。

私は、藁靴わらづつを穿て、合羽かっぱを着た。両脚りょうあしは急に太くなつて、頭から三角帽子を被つたので、丸まるで転がるように身体が円まるくなつた。母は、頭に庄内帽子を被つて、同じく合羽を着て、藁の深靴を穿いて戸を開けて表へ出た。身を刺すように冷たな西風が吹いている。一面に灰色がかつた雪の原野で、彼方に徳兵衛じし爺の家の頭ばかりが見えた。また彼方に正善寺の杉林が黒くなつて見える。二人はとぼとぼと雪道を歩いて町の方へ出かけた。五丁ちようばかりの野原を横切らなければ町まで行けない。その野原には一筋ひとすじの河が流れて橋がかかつている。

愈々いよいよ原にかかると風が強い。雪の上はもう堅く凍こごつていた。道と云ても、誰もわざわざ踏んで付けた道でなく、自然に人が歩いて幽かすかに付いている飛び飛びの足跡を捜して歩くのだ。ちょうど牛の脊を渉ぬきあしるよう、拔足ぬきあしをして歩いた。私が先に立つて、母が後から来る。この頃は、昼前に櫓てりが通るが、通つた跡でまた吹雪がしてその跡を掻き消してしまふのである。今少し前に一つ櫓てりが通つたと見えて踏み落ちた足跡やら、処々ところどころ光つた櫓

の跡が付いていた寒い日であった。

「明日は天気だよ。」と母が後からいいなさる。私は頭をあげて、目深に被っていた、三角帽子を除けて野原の景色を眺めた。灰色の雪が光りを帯んで、西の山々は黒くなって、日が入りかかっている。東を見ても、南を見ても尚更北を見ても暗くて、鬱陶しい空には飛ぶ鳥の影も見えなかった。私は睨と空を見ていると自から瞼が閉じて、心の曇りを感じた。ただ何の気なしに西の空を見る。山又山に山は迫って重っている。日はその又山と西の奈落の底に沈むのであろう。厭らしい黄色な幅広い一筋の雲が、くつきりと灰色の空に浮き出していた。——ただその黄色な雲の帯が長く横つているのを見たばかりで、後は日の落つる処も見えない。——もう私は、日が沈んでしまった後でないかと思つたが、これを母に聞いて見る気にもならぬ程、心が鬱いでいる。

「あの、雲ご覧、帯のようなこと。」と母はいつて指さす。

全く灰色の、暗い空の幅広の一筋の雲が一直線を引いたようになってるのは気味のよいものでない。

私はただ、滅多に斯様景色は見られないと思つた。……ただ、とぼとぼと母と二人で雪道を歩いていると、遠くの遠くで、ど、ど、ど——という物凄い音が聞える。耳を澄すと

確たしかに日本海の波音である。二人はやつと橋の上を渡った。……岸に雪が積っていて、河の流れは細くなつて、殆ほとんど見えなかつた。二人は橋を渡つて、またあるかなきかの道をたどつた。漠ぼくぼく々々として四辺あたりには一人の影も認めなかつた。

私は今でも、その当時の光景ありさまを覚えてゐる。遙か彼方に二本の杉の木が見えて、右手に藁屋わらやが見える……その向うの方から一人の白装束をした男が来た。長い棒を突いて、胸にきらきらと光る鏡をかけて、頭髮は黒く蓬よもぎのように纏もつれて、何か腰の周圍まわりにじやらんじやらんと曲まが玉たまのようなものが幾つも吊下つていた。……私は不意ふいに先刻母が語つて聞かせた大貫村の幽霊話を思い出して、急いで母の後に隠れて、しかとしがみついた。

「怖くないよ……。」
と母はいつた。

北方の灰色の空は眠つてゐる。その雲の中からも降りて来きたように長髪白衣びやくえの鏡を胸にかけてた男は、雪道の上を此方こちらにぎくぎくと歩いて来た。彼方かには彼の杉の木と、藁屋わらやが、それも遠方に見えるばかりである。……やがて男は、もう五六間けんに近づいた。私はこの時怖る怖る顔を出して覗くと、頭には笠も被らず、口も顎あごも真黒に髭が延びている。青褪あおぞめた顔には額まで髪が掩おつ被かぶつて眉毛は太く眼の光は異様に輝いていた。私と母はどうや

つて、彼の男を避けようと細い雪道の上でまごまごやっている、男の方で止つて、一足雪の中に埋つて、私共の通るのを待つてくれた。母は、

「有難うご座います。」

といつてその前を急いだ。私も急ぎ足で母についてその前を通つた。この時ぎらぎらと眼が眩むように鏡が光つた。曲玉がじやらじやらと鳴る。男は口の中に籠り勝ちな、力の入つた声で、

「六根清浄々々」といつた。

私はその沈鬱な声がいつまでも忘れられない。晩方の寒い天氣に、男の鼻息が白く凍つて見えた。私も母の真似をして頭を下げてその前を通つたのである。男は大様に会釈したが、その儘私共が歩いて来た道の方へ行つてしまった。私はまた急いで母の先になつて、幾たびも幾たびも振向いて見た。母も少しばかり歩いてから振向いた。その男の白装束の後には脊一ぱいに何やら太い文字が書かれてあつた。見送つているとその姿はだんだん遠くなつてしまつた。

「お母さん、あれは何だろうかね。」と聞いた。

「あれかえ、行者だよ。」と、母はいつた。

「行者つて何？……」

「旅をして歩く信者だよ。」と母がいわれた。

メランコリーな空は暗い。雪の上は灰色に凍つて、見渡すかぎり、寂^{じやくまく}莫^{もく}としている。その時私の母は四十幾つであつた。脊^せの低い瘦^{やせ}た人柄であつた。私は未^{いまだ}に当時のあたりの傷^{いたま}しい景色が身に浸^ひみていて忘れられない。

何^なんでも暮方の天氣が非常に寒かつた。西の空の、黄色い雲はいつしか消えて、鋸^{のこぎり}の歯^はのようにぎくぎくした形をした山々は地球の上にしがみついて黒くなつて見えた。——二人は吹雪の来ない間に湯に入つて帰ろうと急いだ。帰りには暗くなると、道が分らないからというので、母が小さな提燈を吊下げて来たが、それさえ吹雪が起^{おこ}れば、あの橋のあたりは、全く道が消えて方角が分らない。それに雪に隠れた深い河もあるので、早く行つて帰ろうと急いだ。この時も尚^なお、ど、ど、ど——という波の音が遥かに微かに聞えたのである。先刻の行者は、あの波の音の聞える、浜辺の村の方から来たようだ。あの男の足跡らしい、草鞋^{わらじ}の痕が処々についていた。稀^{まれ}には深く落ち込んでいた処がある。……私は、ああ、あの暗い、波の音の聞える今町の方からあの行者は歩いて来て、今晚何処の村へ泊る考えであろうかと母に聞いて見た。

「さ、新井か関山の辺り（我村から三里四里先）へ泊るのだろう。」と答えた。

それから、暫くは二人は黙つて道を歩いた。やつと彼方に五六十軒固かたまつた小さな町の頭が見え出した。暗い暗い空にとろとろと真白な烟けむりの、上つてゐるのは湯屋である。私は立止つて、きつとその方を見遣みやつた。……

私は北欧某詩人の北光を讚美した詩を読んで、偶然ふとした北の故郷にあつた幼児おきなごの昔を懷想して、黄色な雲——灰色の空——白衣の行者——波の音——眼に尚お残つてゐる其等それらの幻が私の心から拭ぬぐい去られないで、いかにも神秘に感ぜられる。——多年都会生活に疲れた私の魂は北幾百里奇蹟ミラクルの多い故郷にさ迷つた。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 小川未明集 幽霊船」ちくま文庫、筑摩書房

2008（平成20）年8月10日第1刷発行

2010（平成22）年5月25日第2刷発行

底本の親本：「定本 小川未明小説全集1 小説集※〔#ローマ数字1、1-13-21〕」講談社

1979（昭和54）年4月6日第1刷発行

初出：「新小説」

1908（明治41）年10月号

入力：門田裕志

校正：坂本真一

2017年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

北の冬

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>